毎日の保育問題（六）

上澤　謙二

一一　ポケットの中の黍がら

お庭で自由あそびの時、ふと日ちやんの胸のところのポケットを見た先生はハツとした。そのポケットから、わづかにはみ出してゐる赤、青、黄、紫の黍がらを見たのである。途端に顔はカツとあつくなつて、背中はひやりと汗ばんだ―それ程のショックを受けたのである。

その黍がらは、さつきお細工をする時使つたものである。さうしてお細工が濟んでから、子供達がほしがつて『先生、私に頂戴、少し頂戴』とねだつたのを、大勢にやり出したら際限がないし、又さういふ習慣をつけるのはよくないと思つて『これはお細工だけに使ふの。おもちやにしないのね』といつて、戸棚の中へしまつたものなのである。それを今、その子供のポケットの中に見出したのである。それ程のショックを、先生が受けたのも無理はない。

子供もハツとしたらしい。その證據には、ちよつとむづかしい表情が、何かの影のやうに顔を掠めると同時に、右手でひよつとそのポケットをおさへたのである。

ところで、それ程のショックを受けたけれども、先生はさういふ心の激動を、顔色にさへ表はすまいと、力めてさあらぬやうにした。又相手のさういふ氣合を見て取つたけれども、わざと知らないやうにわきを向いて『Mちやん、ブランコよく漕げるわね』などといつた。

それは勿論問題が取るに足らぬ小さいものだからではない。けつしてそれを紛らしてしまふためではない。否、全くその反對である。問題が、その場で直に解決し難い重大なものだからである。そつとして置いてひそかによく〳〵

考へねばならないものだからである。

先生はブランコしてゐる子供に聲をかけたり、枠登りのまはりを歩きながら見上げたり、お砂場の中へはいつたりした。けれどもさうしてゐる間も、この問題が心にこびりついて離れなかつた。そのやうにその目も絶えずHちやんから離れなかつた。遠くからでもそれとなく注視した。

けれどももうHちやんに何の違つたところも認められなかつた。いつものやうにキャッ〳〵と聲を立てて鬼ごつこをしてゐる。

先生はさう〳〵園舎のうしろ側へ來て、窓の下によりかかつた。そこへは子供達は來ない。しばらく子供達を離れて考へねばならないと思つたからである。

「この一つの事で、もしあの子を盗癖があるなどと思つたら・・・・」

先づ初めに頭へ浮かんだのはこの考へであつた。

「何といふ誤解、從て何といふ不幸だらう。誤解される者の不幸はいふまでもないが、誤解する者も不幸である。而も教育者にそんなことがあつたら、殊に幼兒教育者にそんなことがあつたら・・・。さういふことは理窟では一應分つてゐる。しかし實際となると—既に禁じたものをそつと持出して、見えないやうなところへ入れて、ふと人がそこへ目を注ぐと手を當てる子供を見ると—どうもかはいくは見えない。寧ろ憎らしく見える。その感情が無意識的に基になつて、その子を「悪い子」にしてしまふことがないといへるだらうか」。

先生は何となくゾッとした。

「今の自分はどうだらう。けつしてHちやんを憎いなどは思へない。それならかはいいと思つてゐるか。正直のところ、特にかはいいとは思はれないが、いぢらしい—さういふやうな氣持は持つてゐる。さうしてあの柔らかな魂を傷つけないで、この事件を素直に解決したいと希つてゐる。それはたしかだ。ああ、こんな場合に、私は、飾る心からでもなく、義務感からでもなく、眞からさう思つてゐる。Hちやんに對してさう思へるとは・・・」

何だかうれしいやうな氣になつた。

「私を見てポケットに手を當てたのも、自分の悪行を隱し晦ましさうとするのではない。先生に叱られやしないかといふ氣遣ひと恐れとからだ」

先生はひとりうなづいた。

「それならどう處置したらよいか。みんなの前で幼兒なりに諭さうか、そんな恥かしめるやうなことが、どうして出來よう。それならひとり呼んで叱らうか、そんな荒々しい無情なことが、どうして出來よう。まして責めることなど・・・・」

ハーッ、長い消息が胸の奥から出てきた。

「諭すのでない、叱るのでない、責めるのでない、さうだ、話すのだ。おだやかな心持で語すことだ。それも話すために話すのではない。今やつてゐるやうなことはけつして通らない、必ず成り立たないといふことを經驗させるために話すのだ。さうだ、さういふつもりでおだやかな心持で話さう」

先生は窗の下から離れた。

再びお庭へ來て見ると、Hちやんはまだ鬼ごつこをつづけてゐる。時々ほかのお友達といつしよに歡聲を擧げる。餘念なく遊びに沒頭してゐる有樣を見ると、呼ばうとして來たのだが、呼ぶに堪へなかつた。そのまま立つて眺めてゐると、やがてみんなやや疲れたらしく、又飽きたらしく『一抜けた』『一抜けた』といふ聲に連れて、いつともなくやめになつた。

『Hちやん！』

呼ぶと『はあいと』、ひびきの物に應ずるやうに返事があつてかけてきた。ポケットはやはり黍がらでふくれてゐる。

「ああ、この無邪氣さだもの」

さう思つた先生は、その思ひを指先に籠めて、ギュッとHちやんの手をにぎつて曳きながら、さつき自分がひとりで考へてゐたところへ連れてきた。さうして向き合つた。

いつも來ないところへたつた二人で來たので、Hちやんは「異常感」を催したらしく、何となくキョロ〳〵しはじめた。その異常感の方が黍がらの記憶より強いためか、ポケットへ手をやるのを忘れてゐる。

先生はその場の異常感を少なくするためにも、相互の親しみを出來るだけ表はすためにも、そこによりかかつてしやがんで、膝の上へHちやんを腰かけさせ、抱くやうな恰好になつて、いつも會話をするのと同じ調子でいつた。

『Hちやんのポケットにある黍がら、先生に頂戴ね』

この際の言葉は飽くまでも「通らない」といふ經驗への媒介である、もしくは經驗の補助である。だから簡にして明なるを旨とする。だから『そのポケットに何があるの』といふやうな問はいらぬ、又は『その黍がら、先生に下さる？』といふやうな伺ひはいらぬ。そんなことをいへばいふだけ言葉のやり取りが多くなつて、それだけ「直接經驗」としての印象が薄くなる。だから初めから結論を持出すのである。

さういはれると、Hちやんはだまつて素直にこつくりする。さすがに言葉に出してのはつきりした應答はしない。

『それはHちやんのものぢやないからね。だからもとのところへ返すのね』

Hちやんは又こつくりした。

『ぢやあ、頂戴』

Hちやんはすぐ出して渡した。

『ごうもありがたう』

さういつて頭をなぜようとしたが、先生はぐつとその言葉を呑みこんだ。

ひよつと最後にそんなことをいつて、そんなことをさして「ほめられた」といふ感じを貽すのはどうか、さうして何とはなき快感を印するのはどうか。幼兒は往々にして一點の强い印象に捉はれて、全體をそれで律してしまふ傾向がある。もしこの最後の一言と一行の色合が、事件全體を塗りつぶすやうなことがあつてはならない。

それはいかにも取越苦勞とも思はれ、神經過敏とも思はれるだらう。けれども幼兒の世界と大人の世界の異なる甚だしき、時に思ひがけないことが起り、思ひも寄らない結果になる。取越苦勞と神經過敏が表に現はれてはならないが、裏では、奥では、さう思はれるくらゐまで、究め、糺し、備へる必要があらう。

それで先生はかういつた。

『はい、よろしい、よかつたね』

これはほめちぎる言葉、甘やかす言葉ではない。はつきりした、しつかりした結末を與へる言葉である。而も一脈のあたたかに祝福を含んでゐる言葉である。

先生は立上がると、又Hちやんの手を曳いて、お庭まで連れてきた。

忽ちお友達が寄つてきて『Hちやん、先生とどこへ行つたの、どこへ』と、右左から聞く。

何と答へてよいか、Hちやんがまごつくのは必定。それで先生が代つてすぐに答へる。

『ちよつと向で御用のお話してきたの』

それだけでよい。長くそれにかかづらふことはいらない。問ひつ答へつすると、おのづから事件の內容が繰りひろげられて、みんなの前でHちやんが恥かしめられるやうな目に遇ふ恐ろしいことにならぬとも限らぬ。

それで、說明はこの一語で切り上げて、この注意を別方面へ轉換する。

『さあ、又鬼ごつこしませう。ヂヤンケンポン』

早くも先生が腕をふり出すと、忽ちみんなそれに應じて大聲を出した。

『ヂヤンケンポン！』

Hちやんも勿論「別方面の轉換」の空氣に引きこまれて、張りきつた顏をして「ジヤンケン」を高唱してゐる。

やがて鬼がきまつて、みんなワツト逃げ出した。Hちやんもワツと聲を擧げて逃げ出した。

先生は鬼に追はれて逃げながらも思つた。

「ああ、よかつた、よかつた」